

# 本を読む

蜂飼 耳

## 内容理解

この文章で筆者は、長谷川時雨<sup>はせがわしぐれ</sup>『旧聞日本橋』を紹介することで、本を書くこと、本を読むことの原点を示している。本文を読み直しながら、空欄に入る適切な言葉を補ってみよう。

長谷川時雨『旧聞日本橋』

・雑誌『女人芸術』の<sup>1</sup>者であり、<sup>2</sup>作家でもあった長谷川時雨の<sup>3</sup>  
で、『女人芸術』は、林芙美子<sup>ふみこ</sup>、平林たい子<sup>たいこ</sup>、中条百合子<sup>ゆりこ</sup>、山川菊栄<sup>きくえ</sup>、矢田津世子<sup>よせ</sup>たちの発表の機会となった<sup>4</sup>であり、その余白を埋めるために書き始められた。  
・江戸の空気がまだ残り、<sup>5</sup>生まれの人たちが息をする頃の、生活や出来事を思い出し、描いた作品。  
・子供の目だけれど、子供の目でない。<sup>6</sup>の目で見た、生活の細部、音や匂いや、人々の顔つきや仕草など、深い思いを込めて描かれている。  
・私にとつては、楽しそうに書いてあるから楽しく読める一冊。  
・時雨が九歳の頃通った二弦琴のお師匠さんのうちには「万年青<sup>おもと</sup>の芽分けが幾鉢も窓に並べてあって、鉢には鰻<sup>うなぎ</sup>の串を刺し、赤い絹糸で万年青が行儀悪く育たないように輪を廻<sup>めぐ</sup>らしてあった」。

（おしよさんが寝ていても、お客様があつても、髪結いさんが来ていても、お湯にいつてきてからお化粧が済んで、さあ始めましょうよと言われるまで、幾時間でも、待てば待つほどおとなしく喜んでいた。）

## 語句

この文章の中で使われていた次の言葉を使って、短文を作ってみよう。

仕草（二九六・六）

行儀（二九六・12）

稽古（二九六・15）

拍子（二九八・5）

「本」

・待つことができた理由は「本」だった。

・「くさ双紙の合巻ものが、本箱に幾つあったかしかない」。(初版摺りばかり、絵入りの読み物がお師匠さんの家にはいくらでもあつて、時雨が大事に丁寧に見るので、感心したお師匠さんは<sup>7</sup>  本を出してくれることもあつた。)

・鳥が<sup>8</sup>  にとまるように、本にとまったまま、動かない少女。その<sup>9</sup>  の角度は誰かを思い起こさせる。

『<sup>すがわらのたかすえのむすめ</sup>更級日記』の作者、菅原孝標女は、「紫のゆかり」にふれて、『<sup>げんじ</sup>源氏物語』が読みたい読みたいとなり、「をばなる人」が姪のために、そのひとそろいを用意してくれた。

〈人もまじらず、木ちやうの内のうち臥<sup>ふ</sup>してひき出でつつ見る心地、<sup>きさき</sup>后のくらひも何にかはせむ〉と、誰にも邪魔されない読書の<sup>10</sup>  が語られている。

←  
本を読む

読むことの好きな人はどの時代にもいる。そういう人が、読むことが好きだ、好きだった、と書き残す。そのほかのこととともに書き残す。だから、読むときは一人、書くときも一人だが、それはいつの間にか見知らぬ誰かの前に広げられる出来事となる。

要旨

筆者の考えの中で最も大切と思われることを、指定された言葉を使って、百字程度の文章にまとめてみよう。

〈指定語——読む・好き・書く〉

発展

次の中で興味を持った事項について、図書館の書籍やインターネットなどを使って調べてみよう。

・二十一世紀に残したい本としてどのような本が選ばれているか。

・『女人芸術』には、『旧聞日本橋』のほかに、どのような作品が掲載されていたか。

・『更級日記』は、どのような作品か。

100